

季節外れの海

小熊陽子

どこへ行こうか迷う週末

少し憂鬱な気分を隠しながら、最良の場所を考える。
講演、遊園地、動物園……。

どこへ行っても気分が晴れそうにない。

こんな時は海へ行く。

真夏の海と違って、灰色の海。

サーファーと、

散歩をしている数人が

まばらに見えるだけ。

潮風が冷たい。

晴れているのに体が冷えていく。

寒いのに上着を脱ぎ捨て

うれしそうにはしゃぐ息子。

ここでは、

人目を気にせず走りまわれる。

煩わしい世間の目から解放され、

身も心も自由になれる。

誰もいない海はいい。

いつも誰かの視線を気にして

へトへトになってしまうから。

ほんの束の間だけど、

世界が

私達だけが変わるから。

海は嫌だと言っていた娘も

夢中で貝を拾い集める。

「きれいなもの見つけた」

輝く笑顔になる。

また明日から同じ毎日。

地平線の彼方に

疲れた心を溶かしてしまおう。

娘からのラブレター

小熊陽子

「ゆうびんです」

小さく折った折り紙の上に、

女の子の絵やハートを描いて

台所まで持ってくる。

折り紙を開くと、

精一杯の思いを伝えるメッセージ。

「ママ、だいすき

こんど いっしょにあそぼうね」

忙しくて

ゆっくり向き合えない時に

独りで書いた

娘からのラブレター。

クリアファイルから

あふれるほど

沢山になったよ。

こんなにたくさん

愛を伝えてくれるほど

寂しくさせてごめん。

いつも傍にいるのに、

なかなか時間を作ってあげられなくてごめん。

本当は、気付いているんだ。

長い時間ではなくても、

密度の濃い時間が必要なこと。

「ママ、いつもありがとう」

私の方こそ

ありがとう。

あなたが大人になっても、

この手紙を

大切に持っているよ。

星のように

小熊陽子

現実の厳しさに

夢を諦めてしまおうかと弱気になる。

この広い世界の狭い街に住む、

ちっぽけな自分。

上手くいかないのが現実。

人生なんて、こんなもの。

それでも進んでいきたい自分と、

少しの間、傷を癒したい自分。

そんな時に流れてきた曲に

涙がこぼれる。

今のままでいいよ

君は君のまま

きみらしくいて

ラジオから流れてくる曲に背中を押され、

心の中で呟く。

「もう一度、挑戦してみよう」

星に願いをかければ叶うと言うけれど、

星はあまりに早く流れていくから

一言も言えずに消えていく。

あの星に願いをかけられる人などいるのだろうか。

それでも、

あの星空を眺めるだけで

疲れた心がどこかへ飛んでいく。

つまらない出来事も、一緒に飛んでいく。

音をたてながら

燃え尽きていく星たち。

また、隕石が集まって

新しい星を作っていく。

星になろう。

ひたすら生きて、燃え尽きて、また星になる。

そして、夜空に輝こう。